

「遠州綿紬」との出会い 新たな改革の始まり



26歳のとき、父の入院や妹の結婚もあって、生まれ育った浜松の地に帰ってきました。名古屋の飲食店をやめて、父が経営する「大幸株式会社」という綿織物や寝具の間屋に入ることにしたんです。

ただ問屋業は厳しい状態にあり、父も会社を縮小する方向で考えていました。入社時は居場所がなく、今後の事を考えている時に出会ったのが、商材の一つの「遠州綿紬」でした。この生地が持つ不思議な魅力に惹かれ「この素材に賭けてみよう」と、興奮したのを覚えています。

そして27歳、私はこの「遠州綿紬」をもって独立し、「有限会社ぬくもり工房」を設立しました。

40年ほど前はこの地域に遠州綿紬に関わる機屋さんは300軒前後あったと聞いています。現在はわずか数軒にまで減少…。このまま問屋商いを続けていってはだめだと思い、着手したのが、インターネット販売です。

ネットオークションを利用して、個人のお客様に直接販売する方法を取り入れました。問屋として商社に卸していたときは、使い手の様子がまったく見えてこなかったのですが、直接販売では、具体的にお客様の反応を見ることができます。それは商品開発の大きなヒントになっています。

綿紬は奥深いなって思うんです。模様一本線があるかないかで、生地の印象はガラッと変わる。そんな奥深さを活かした商品の開発にも着手しました。企業と手を組んで商品化することもあるれば、デザイナーと一緒にデザイン段階から考えることもあります。使い手のニーズに合わせて開発するんです。

現在、商品は約20~30点あります。商品のテイストは毎年レベルアップしていますし、成長できていると思いますね。



浜松の「伝統」をもって、世界をまたにかける

伝統織物の職人は、60歳でも若いといわれる世界です。もともと「繊維の街」として栄えてきた浜松で、こうした伝統がなくなるのは、やはりもったいないこと。

「伝統」というと、なんとなく弱い立場にある気がしませんか？守っていかないと消えてしまいそうな…。でも、そんなことないんです。伝統は単に守るのではなく、進化させることで、むしろ最先端をいく強い立場になり得るのです。「伝統」だけうたっていても、人々の心には響かないですからね。



実は私の母校で、今年初めておもしろい取り組みが始まりました。学校が生地を買って生徒が商品を作り、学園祭で販売するというものです。

これは1つの例ですが、他にも文化活動を通じて地域全体に遠州綿紬の存在を認知してもらう活動を広めて行きたいと思っています。

将来この「遠州綿紬」を地域ブランドとして地域の皆さんで育ててもらえるような環境をつくり、産業として残っていく。それに向けて挑戦し続けていきたいですね。

浜松はものづくりの街。これからも職人さんと共に、この地に足をつけて働けるのは私にとっての喜びです。